中学生の部

左京区長賞・京都保護観察所長賞

『虐待』で見る社会

京都市立洛北中学校三年　石井　そら

私が思い描く「明るい社会」とは、多様な世代が互いに支え合いながらよりよいコミュニティーの構築に取り組み、次の世代に継承していくような社会です。私は、このような社会を実現することで、現代の大きな社会問題である、親による子どもの虐待を減らすことができるのではないかと思います。

近年、子どもの虐待死は年間五十件を超え、一週間に一人が命を落としています。また、悲惨な事件を犯した犯罪者が、親からの育児放棄や虐待を受けていたという例も多くあります。その度にSNSでは、「虐待を受けても、過去を乗り越えて立派に働いている人がたくさんいる。虐待を受けた過去は関係がない。」といった意見が見受けられます。犯人が犯した罪を償う必要があるのは当然ですが、私はこのような意見に一概に同意することはできません。実際に虐待は子どもの脳の発達に影響を与えることが示されています。また、私の周りでは、どの親も子どもに寄り添い、とても大切に育てています。そのため、大多数の親に愛され、大切に育てられている子どもたちに囲まれ、親から虐待を受け、「自分は親に愛されていない」と感じながら育つ子どもの孤独は計り知れません。周囲の子どもと自分の境遇を比べて、なぜ自分だけがと絶望し、虐待する親と親をそんな大人にした社会を恨む子どもが出てきてしまうのも当然ではないかと思います。このことから、私は、虐待を減らすことは子どもの被害を減らすだけでなく、社会を不安定化する要素である、「犯罪」を減らすことにもつながると考えます。それでは、虐待を減らすために、私たちにどのようなことができるのでしょうか。

私は数年前、海水浴場で、五歳くらいの男の子がシュノーケルをうまく使えないことに苛立ち、すごい剣幕で子どもの頭を無理やり海につけて練習させている若いお母さんを見たことがあります。その後そのお母さんは、「もっと遊びたい」と泣く男の子を引っ張って海から帰っていってしまいました。一部始終を近くで見ていた私たちは暗い気持ちになり、私の母は「難しいね。」と言いました。感情的になっているお母さんに、他人が「かわいそうだからやめましょう」と言っても、かえってそのお母さんの気持ちを逆撫でて、子どもに辛くあたりそうに思えたからでしょう。私たちにできることは、そのお母さんの行動がこれ以上エスカレートしないように近くで祈るように見守るだけに思えました。

あのような状況をどうやったら改善できたのかと今でも考えることがあります。一時的に虐待を止めるだけでなく、子どもに辛くあたってしまう親の不安定な精神状態のケアをすることが必要に思えました。あのお母さんも子どもを喜ばせたいと海に連れて来たのだと思います。けれども、中々思い通りにいかない子どもに苛立つ気持ちを抑える心の余裕がなかったのではないでしょうか。私も将来もし子どもを持ったとき、いつもニコニコとした母親でいられるだろうかと考えました。あの時、お母さんに注意するのではなく、若いお母さんの気持ちを楽にすることができたらよかったのではと思います。しかし、そのような対応は、その時ただ居合わせただけの他人には難しいことです。したがって親子が暮らしている地域での周囲の人々の普段からの人々の普段からのはたらきかけがとても大切だと思います。例えば、一人一人が周囲にもう少し目を配り、弱い立場の子どもや孤立している親などに気付けたら、あいさつや声かけなどのコミュニケーションを取るなどして様子を見守ることができるのではないでしょうか。そして、必要な場合には公的機関の支援につなげる手助けをすることが大切だと思います。また、私は保育所や学童保育に通いながら成長してきました。私の母は、子どもを学校に加え、これらの施設に通わせることができたことで、職員の方や周囲の保護者の方に気軽に子育ての悩みを相談することができたと話していました。また、これらの施設を利用することで、親子が地域とつながる機会も増え、より地域とのつながりを持つことができるようになります。したがって、子育てや生活に負担を感じている親が、これらの施設を気軽に利用できるように、利用条件のハードルを下げることが大事だと思います。地域の多様な世代の人たちが親子と関わりを持ち、親が孤立せずに、自分たちだけで子どもを育てているのではないと、いつも感じられる社会にすることで虐待を減らすことができるのではないでしょうか。

そして、このような周囲の人々とのつながりが必要なのは、子どもを持つ親だけではありません。周囲とコミュニケーションをとることで、「多様な世代が互いに支え合いながら、よりよいコミュニティーの構築に取り組み、次世代に継承する」社会につながります。